定　例　記　者　会　見

平成 30 年 12 月 4 日（火）
午前 11 時～午後 0 時 01 分
柏崎市役所大会議室

1　発表事項

（1）　平成 30 年度　柏崎市道路除雪計画の概要

（主管：維持管理課）

平成 30 年度の柏崎市道路除雪計画は、昨年度とほぼ変わりませんが、車道除雪が 1.9 キロメートル・歩道除雪が 1.0 キロメートル増えました。

平成 29 年度は大雪で、市道部分の除雪費は約 8 億円でした。町内への補助、除雪車借り上げ料などを含めると、合計で 9 億 4000 万円かかりました。県道の除雪費は 4 億 6000 万円でした。

市のホームページにある「まちナビ柏崎」で、市の除雪路線などが確認できるようになりました。家の前の道路が、市道であろうと、県道であろうと、国道であろうと、市民の皆さまに「除雪はどうなっているのか」というお問い合わせをいただきます。たとえ県道であっても県に電話をかけてくださいとは言いませんが、除雪路線が市道・県道・国道なのかということをインターネットで確認できると、問い合わせ先も違うのかな、ということで公開しました。

原発の立地地域なので、避難計画を実効性あるものにするためには、除雪に課題があると国に話をしてきました。除雪の経費のことも、国と世耕大臣に対して柏崎の雪の実態を写真入りの資料で、訴えています。重ねて国には除雪について避難計画を併せて財源措置を含めた話をしていかなければならないと考えています。

（2）　柏崎の魅力満載の下水道マンホール蓋が人気のカードになりました
―マンホールカードを無料配布します―

（主管：お客さまサービス課）

日本下水道協会と柏崎市の共同作成でマンホールカードを発行します。12 月 14 日から JR 柏崎駅構内にある柏崎観光協会事務局で無料配布を始めます。

今回、日本下水道協会が作成するマンホールカードは、第 9 弾で 60 種類 60 自治体が発行するそうです。これまで県内で 15 種類、10 自治体（新潟県、新潟市、長岡市、三条市、新発田市、小千谷市、十日町市、村上市、燕市、阿賀野市）から発行されています。

シンボルマークをかたどったマンホール蓋は、西本町地内と西港町地内にあります。柏崎シティセールスのシンボルマークは、えちゴン、花火、米山大橋、米山、海、綾子舞、高柳の荻ノ島、松雲山荘の紅葉を盛り込んだマークです。この他、柏崎市には8種類のデザインマンホールがあります。マンホールカードには、緯度経度が書かれています。この緯度経度を頼りにマンホールカードを探しに来るファンがいるそうです。

(3)　市街地循環バス「かざぐるま」新車両導入

（主管：企画政策課）

市街地循環バス「かざぐるま」と「ひまわり」のうち「かざぐるま」に新車を導入します。「かざぐるま」は、平成13年の運行以来、62万キロメートルを走りました。12月6日にアルフォーレで、お披露目式を行います。どなたでも参加できます。中央地区の代表者の方と、保育園児の皆さんをお招きしたいと思っています。「かざぐるま」は、アイドリングストップ機能や平成28年度排出ガス規制に適合し、環境性能がアップしました。

満65歳以上の方が専用回数券を購入すると80円で乗車できる高齢者割引制度があります。議会で専用回数券の販売場所を増やしてほしいという意見があり、平成31年度から販売場所を増やす方向で検討をしていきたいと考えています。

(4) ヨソモノ・ワカモノと一緒に地域おこし
—市内4地域で、地域おこし協力隊の募集を開始—

（主管：市民活動支援課）

地域おこし協力隊は、これまでに高柳町荻ノ島、高柳町門出で2人を採用しました。

今回、北条の岩之入、矢田、高柳町荻ノ島、高柳町門出の4つの地域で、地域おこし協力隊を募集します。募集期間は、12月16日から2月12日までです。現地を見てから参加するか決めたいという方のために、体験ツアーを企画しています。最終的には来年4月1日の採用となります。

全国各地で地域おこし協力隊をやっていますが、柏崎の特徴は、任用中の副業を積極的に推奨することです。任用終了後、柏崎に残り定住してもらうためには、副業を考える必要があると思ったからです。

ちなみに、全国の地域おこし協力隊は、997の自治体で4830人の方が活動しています。全国自治体の数が1700余りなので、半分以上の自治体が地域おこし協力隊を採用しています。

（5）ぎおん柏崎まつり 2019 海の大花火大会カレンダーを限定販売

（主管：商業観光課）

本日、12 月 4 日から柏崎観光協会、市内の書店、柏崎市役所売店などで、ポスター型のカレンダーと卓上のカレンダーを販売します。昨年のポスター型のカレンダーは、ブルーブラック色の空と夕焼けと花火があしらわれた非常に素晴らしいものでした。今年は華々しいというか、市民一同の心意気を見せた花火です。卓上カレンダーの 4 月の写真は、尺玉の 100 発同時打ち上げです。なお、これらのグッズは、昨年桟敷席などを購入いただいた方に、既にお送りしています。

（6）松雲山荘紅葉ライトアップの今年度来場者実績

（主管：商業観光課）

松雲山荘の来場者の累計は、天候に恵まれたこともあり、昨年度に比べて累計で約 7000 人、41.9 パーセントの増でした。隣接の木村茶道美術館の入館者も 13.9 パーセントの増。松雲山荘ボランティアガイド利用者数は 15.1 パーセントの減。もみじ園ともみじ谷と行っているライトアップ紅葉めぐりスタンプラリーは、10.9 パーセントの増。錦秋の越後紅葉めぐりバスツアーが 2.4 パーセントの増でした。ボランティアガイドの利用者が減ったのは、ボランティアガイドの方が高齢化で、繁忙期に対応できる方が少なくなったことが原因です。

どういった方がどこから松雲山荘の紅葉を見に来ているのか、新潟産業大学の春日ゼミに委託をして、調査を行いました。ツアーで訪れたお客様は、9 割が県外からで、内訳は、関東が 4 割、近畿が 4 割、中部が 1 割でした。県内からのお客さまはおおむね 1 割でした。年齢層は大半が 50 歳代から 70 歳代です。おおむね 6 割から 7 割が女性でした。松雲山荘に来園した時間帯は夕方と夜間が約半々でした。詳しいデータは集計中です。

（7）好きからはじまる、あなたの生き方
―「まちから」でまちづくりのスクールがスタート―

（主管：市民活動支援課）

後ほど、NPO 法人まちづくりネットあいさの水戸部さんに、詳しい説明をお願いしたいと思います。

このスクールは、12 月 15 日から 3 月 2 日まで 4 回あります。事業だけでなく、柏崎で何かをやりたいという意欲を持つ方に、スクールで学びながら、柏崎で自分なりの新しい豊かな

人生をつくりあげてほしいというのが狙いです。では、水戸部さんお願いします。
水戸部：柏崎では、中越沖地震以降、地域で何かやりたい、貢献したいという市民の方が増えていて、市民活動団体・NPO など、社会的な事業をする皆さんが少しずつ育ってきている現状があります。市の元気なまちづくり事業補助金などは、そういった方の資金面での支援などを行っていますし、「まちから」では、まちづくりコーディネーターがそういった活動をする方々のフォローアップをしています。これまで以上にまちで活躍するプレーヤーを増やしていきたいと思い、スクールを開催する運びとなりました。自分のやりたいことや好きなこと、生き方と今の柏崎が抱えている地域課題の解決をどうリンクさせて事業として行っていけるのかを先輩方と一緒に学びながら形作っていくスクールです。矢島さん、小川さんは、元気なまちづくり事業補助金を通じて新しいプレーヤーとして育ってきた方です。二人の悩みや、実際にやってみてのノウハウを一緒に学びながら、自分らしい生き方、まちへの貢献の仕方というものをつくっていくスクールです。

（8）来年１月１日以降、市が発出する文書などは西暦を併記します

（主管：総務課）

平成の元号が来年の５月１日に変わります。元号と西暦の併記は、法などに抵触するのか確認しましたが、特に問題はないということでした。神戸市は、西暦だけを表記すると聞いています。元号は、日本の文化の１つだと考えていますので、表記をなくすつもりはないです。ただ、国際化が進んでいますし、市長を拝命してから元号を西暦に直すと何年か、西暦を元号に直すと何年か、ということを確認することがありました。今回、元号が変わることを機に西暦と元号を併記したいというところです。併記の仕方は、資料の通りです。
システムは、数千万円の経費がかかるので、すぐには行いません。

2　質疑応答

◎松雲山荘ライトアップの来場者実績に関する質問

記者：新潟産業大学が調査したツアーの件数と、調査結果を受けての今後の方向性は。

市長：件数は、調査中のため後で連絡します。
調査結果の生かし方は、例えば夏の海の観光客誘致は、群馬県をはじめ関東圏が中心でした。

紅葉のシーズンは、関西方面のお客さんの数が、関東方面と同じくらいだとすれば、関西方面にも観光戦略を向けなければならないと思います。それから、女性のお客さんが 6 割から 7 割だとすれば、トイレの数が足りていたか、トイレの環境がきれいであったか、ということも気になります。来園時間帯は、ライトアップの前とライトアップ中の時間と半々ぐらいだとすれば、ライトアップ自体が伝わっていなかったのか、それとも、旅館の食事の時間の都合で、ライトアップ前だったのか。具体的なデータを聞かせてもらいたいと思っています。いずれにせよ、松雲山荘を中心に、高柳の貞観園と新道の飯塚邸を併せて、秋のシーズン、新緑のシーズンをどのように広げていくかを考えるための資料として、データを使いたいと思います。

記者：関西・中部方面の来場者が多いが、どういうルートで来ているのか、ツアーはどのような組み方がされているのか。

市長：ルートについては、調査中です。ツアーの組み方については、松雲山荘がメインではないと思います。もみじの見学を 1 カ所ではなく、近隣の長岡市のもみじ園と弥彦村のもみじ谷を組み合わせてお得感を演出しているのではないかと思います。

◎地域おこし協力隊に関する質問

記者：数年ぶりに採用することの狙いは何か。

市長：シティセールスの目的を、定住人口の増加に見直しました。一定期間地域に根差した活動をしてもらい、地域の方と一緒に過ごしていただいた後、定住につながることが一番理想的な流れではないかと思いました。その手段として、ベストに近いものが、地域おこし協力隊であると理解し、募集を始めました。

記者：副業の推奨は、全国各地の事例を見て、思いついたのか。

市長：柏崎の現状を考えてのことです。例えば農業だけで生計を立てるのは、難しいと思います。岩之入、矢田、荻ノ島、門出は、中山間地域です。定住するためには、収入が必要だ

ということを理解してほしいという意味で副業を推奨します。

記者：副業を希望した時、就職先は紹介するのか。

市長：ハローワークやUIターン情報ステーションを紹介しながら、副業としてこういったものが考えられますという提案はできると考えています。

記者：副業としては、どんなものがあるか。

市長：例えば矢田は、矢田営農組合が独自に産業化を進めていて、生産物をスーパーなどに卸しています。自分の生産物を販売の現場で手伝うことが考えられます。地域おこし協力隊がそれぞれの仕事をどういう時間帯に行うのかということを含めて、自分で、地域の方と考えてほしいと思っています。

記者：基本的には農業か農作物の販売か。

市長：農業、農作物の販売以外もあるかもしれませんが、地域おこし協力隊の活動に資するような副業があればいいなと期待をしています。

◎西暦併記に関する質問

記者：市民生活・業務で混乱を避けるために併記するということだが、5月1日という元号が変わる時期を見通してのことか。

市長：それは、あります。今の時代、元号と西暦の表記は必要だと感じています。日常生活で、元号を西暦に、西暦を元号に換算し直している方が多いと思います。市は、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン構想に登録され、相手国のセルビア共和国とモンテネグロに公文書を出す機会が多くあります。そこに元号を書いても意味がないので、西暦で書いています。そういったことを含めると併記は、市民の皆さんも市も一番現実的で、便利なのかなと考えています。

記者：両方併記するのは、県内自治体で柏崎が初めてか。

市長：併記すると決めた自治体はないと認識しています。

◎原発に関する質問

記者：情報共有会議で、知事が年度内に机上訓練をしたいという意向を表明していたが、市長として盛り込んでほしいものはあるか。

市長：問題は、どのような状況を想定して机上訓練を行うのかです。例えば春・夏・秋・冬・昼間・夜間といった、いろいろな状況を想定できます。机上訓練の時間はかからないと思うので、いろいろな想定で机上訓練をやってほしいと考えています。

記者：市長の希望としては、冬の訓練実施だと思うが、除雪がどのように絡んでほしいか。

市長：実働訓練を冬場、夜間にいきなりやってほしいとは言っていません。春先、夏、秋などやりやすい昼間のシーズンから順次、実働訓練を進めてもらえればありがたいです。その中で、避難計画の見直しが必要だと思っています。机上訓練は、夜間・冬場の一番厳しい条件を想定して行ってほしいです。

記者：机上訓練または避難訓練での情報共有について、東電と訓練したいことはあるか。

市長：市には「原子力災害に備えた柏崎市広域避難計画」と現在、見直しを行っている「防災ガイドブック（原子力災害編）」があります。時間を置かずに東電・県・国と協議を進めていかなければならないと考えています。

記者：先日、東電からケーブル火災の原因は、断線の可能性が高いという途中経過の報告があった。受け止めは。

市長：報告書には、設置線の断線などの不具合があった可能性が高いと書いてあります。接

続部分は管理区域外でしたが、管理区域内にあれば、リスクは高くなるわけです。断線の不具合があったとすれば、どのように確認すればいいのか。技術的な問題があるかと思いますが、東電に、具体的な原因究明と対策を順次求めていきたいと思います。機会があれば、直接、そのことを伝えたいと思います。この件は、原子力規制委員会の方も興味があると思いますので、規制委員会のコメントを聞きたいです。

◎外国人材に関する質問

記者：市として外国人材の受け入れを期待しているのか、受け入れを拡大することへの懸念はあるか。

市長：柏崎市は、建設業界・介護業界が特に人材不足です。少なくとも介護人材は、外国の方に補助的なお願いをする可能性があると思います。実際、今春、日本語が堪能なネパールの友人を柏崎の福祉団体の代表・理事長・事務局長に紹介しました。
外国人材の受け入れは、仕事の現場や市民生活で、治安を揺るがすような事態が起きる可能性がゼロとは言えません。国が保安整備で払拭できるように時間をかけてほしいです。
基本的には外国人材を受け入れるべきだというのが私の考えです。

◎市長就任 2 年目に関する質問

記者：就任してまもなく 2 年になるが、満足度は。

市長：偉そうに言うつもりはありませんが、自分なりの力と時間を 100 パーセント費やしたと思っています。就任 1 年の時も同じような質問がありましたが、2 年経っても全力疾走を続けざるを得ませんでした。
ただ、市民の皆さんの満足がどれほど得られたのか、明確な方向性を示すことができたのかということに関しては、成果も含めて 50 パーセントぐらいじゃないでしょうか。

記者：どこで 50 パーセントと感じたのか。

市長：原発の再稼働問題への方向性を見いだすことができませんでした。それから、新潟産業大学の問題。フォンジェの問題。イトーヨーカドーの撤退。富士ゼロックスの撤退。これらの問題に、現在進行形で奮闘努力をしている最中ですが、市民の皆さんにはっきりしたと方向性を示すことができていないので、50 パーセントに止まっています。
成果の 50 パーセントは、評価が分かれるところですが、事業峻別を行ったことです。具体的な政策の部分でステップアップしたと思うのは、教育の部分で指導補助員と介助員を増やしたことです。人材育成が一番大事だと言ってきましたが、そのベースとなる子どもたちの教育環境を整え、充実させるよう努力しました。
ハード面では、国の動きに先んじて 2 年前から小・中学校の普通教室にエアコン設置を進めています。子どもたちの学習環境を整えるという点では、成果に近いものがあります。

記者：今後の 2 年間でこれらをやっていきたいというものはあるか。

市長：課題としてあがっているところは、解決しなければなりません。事業峻別で、どういう部分を市民の皆さん、民間の方にお願いするのか。行政は限られた財源の中で、どこにウエイトをかけて仕事を行うのかということは、難儀な作業だと思いますが、やらざるを得ないこととしてやるつもりです。

以上